

高齢者を含む三世代, 四世代世帯におけるリフォーム実態と傾向 —愛知県「わが家のリフォームコンクール」応募作品による検討—

小川正光* 塚原未侑**

*家政教育講座

**豊橋市立青陵中学校

State and Tendency of Housing Reformation taken place in Households of Three or Four Generations — Analysis in Application Works to 'Reformation of My House' sponsored by Aichi Prefecture —

Masamitsu OGAWA* and Miyuki TSUKAHARA**

* Department of Home Economics Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

** Seiryoh Junior High School, Toyosashi City, Toyohashi 440-0016, Japan

1. はじめに

わが国は少子高齢社会となり, 高齢者のみ世帯の増加, 三世代同居の減少など, 世帯形態にも大きな変化がみられている。高齢者のみ世帯では, 緊急時における対応や日常生活において困難な場面が生じている。また, 意識調査においても, 祖父母や父母, 子どもなどが同居する世帯に対する志向が過半数を超える実態もみられる。多世代が同居をする生活上の有効性を評価することは重要である。

住宅の側面では, 既存ストックの有効活用や資源の効率的な循環が求められている。良質な材料で建てられた質の高い住宅ストックをリフォームして使い続けることが期待されている。

したがって, 既存の古い住宅に手を加え, 現在の生活様式に合致した, 三世代以上の多世代が気持ちよく同居できる住宅へとリフォームする方法と, リフォーム後の住宅のあり方を検討することは, 重要な課題である。

本研究では, 愛知県内で実施された住宅リフォームのデータを対象とした分析を行うことにより, 世帯人数が多く, 多世代が生活するのに適したリフォームの行い方や住空間の構成について検討し, 今後のあり方

を示唆することを目的とする。

2. 研究の方法

本研究では, 愛知県ゆとりある住まい推進協議会主催の「わが家のリフォームコンクール」における平成13年度から平成19年度までの7年間の応募作品を対象とし, その分析を通して, 三世代以上の高齢者を含む世帯の住宅におけるリフォームの実態を明らかにし, 今後の高齢者が同居する世帯におけるリフォームのあり方に関する検討を行った。

まず, 愛知ゆとりある住まい推進協議会主催の「わが家のリフォームコンクール」の7年間のすべての応募作品について, 世帯型別の特徴を分析し, 高齢者を含む世帯におけるリフォームの実施比率が高い状況を把握した。

次に, 三世代と四世代の高齢者を含み, 世帯人数が多い世帯を抽出し, リフォームを実施することになる要因について分析し, リフォーム前後における住宅の基本属性の変化と, 生活スペースの使い方における変化を考察し, 高齢者が同居した住宅のあり方を検討した。

表1 年度別、応募作品数（全サンプル）

	H13 年度	H14 年度	H15 年度	H16 年度	H17 年度	H18 年度	H19 年度	合計
サンプル数	42	44	59	59	43	47	54	348

3. 世帯型別、リフォーム実態

3.1 世帯型別、リフォーム実施状況

7年間の応募作品の年度別の分布は（表1）、各年度とも50サンプル前後で、ほぼ均等になっていた。応募作品のすべてを対象にした、世帯構成の分類を表2に示す。ここでは、世代に注目して4世代に分類した後、構成員による再分類を行い、さらに、「その他」を加えて9タイプに分類した。

表2は、リフォームを実施した世帯型の頻度を示しているとも考えられる。世帯型別にみると、社会的に比率が高いと考えられる「夫婦+子」が占める割合は最も高いものの、続く「親+夫婦+子」との差は、大きくはないのである。「高齢単身」や「高齢夫婦」、「親+夫婦」、「親+夫婦+子」、「祖父母+親+夫婦+子」といった、高齢者がいる世帯、もしくは高齢者がいると考えられる世帯のサンプル数を合計してみると、137サンプルとなり、全体の、約50%が高齢者を含む世帯となる。この高い比率は、高齢になると、生活空間や日常的に使用する住宅の設備等に不便さを感じるようになり、改善するためにリフォームを実施した比率が高くなったことがうかがえる。主に、バリアフリー化のためのリフォームが行われたと考えられる。したがって、世帯に高齢者が含まれることは、リフォームを実施するうえでの大きな要因と考えられる。

図1は、各年度別にリフォームを実施した世代を示す。この推移をみても、子どもや高齢者を含んだ三世帯以上の世帯の割合は、一時期減少傾向を示したものの、平成16年から一貫して30%から40%の高い割合を

表2 世帯型（全サンプル）

一世代世帯	単身	15	92
	高齢単身	5	
	夫婦	58	
	高齢夫婦	14	
二世帯世帯	夫婦+子	110	132
	親+夫婦	22	
三世帯世帯	親+夫婦+子	90	90
四世代世帯	祖父母+親+夫婦+子	6	6
その他		2	2
不明		26	26
総計		348	348

※数値はサンプル数

占めていた。今後も高齢者を含んだ世帯におけるリフォーム比率は高く推移すると考えられる。

3.2 世帯型別、リフォームに要した費用

リフォームに要した費用に、世帯型別に注目してみると（図2）、「夫婦」や「夫婦+子」と比較して、「親+夫婦」や「親+夫婦+子」、「祖父母+親+夫婦+子」という高齢者を含む世帯の方が高い費用をかけていることがわかった。1,500万円以上の費用をかけて実施している比率が約40%を占めているのは、これら的高齢者を含む同居世帯だけである。

また、各世帯型におけるリフォーム費用を平均により検討すると（表3）、最も高いのは「祖父母+親+夫婦+子」の1,307万円であり、次いで「親+夫婦+子」の1,273万円、「高齢夫婦」の1,176万円であった。高齢者を含む世帯では、住宅リフォームに比較的高額な経費をかけていることがわかった。中でも、子どもの世代と高齢者の世代が同居する三世帯、四世代の世帯が高かったことが注目される。

世帯構成のタイプとリフォームの実施状況の概要を検討した結果、高齢者と子どもを含む三世帯世帯や四世代世帯において、リフォーム実施比率が高いことがみられた。その理由として、以下の2点が考えられた。

第1は、高齢者から子どもまで幅の広い年齢層の改善要求を実現する必要があったこと、特に、高齢者の身体状況や生活の変化に対応した改善が切実に求められ、リフォームを実施したことである。

第2は、リフォームに要した費用が高いことから、実施する支出が可能な資産を有した世帯型であることが指摘される。

したがって、高齢者、子ども、夫婦という世代が同居する三世帯、四世代では、構成員の誰にとっても暮らしやすい住宅を、費用をかけたリフォームにより実

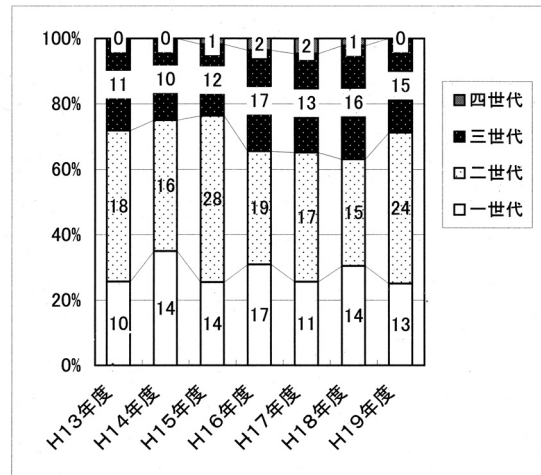


図1 世代別、リフォーム実施世帯数の推移

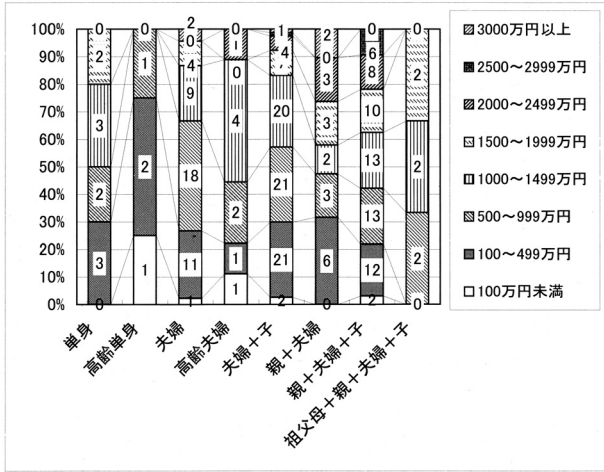


図2 世帯型別、リフォームの費用

表4 年度別、三世帯、四世代数

	H13 年度	H14 年度	H15 年度	H16 年度	H17 年度	H18 年度	H19 年度	合計
サンプル数	11	10	13	19	15	17	15	100

現していると考えられる。本研究では、三世帯世帯と四世代世帯の同居世帯に焦点を絞った分析を行う。以下、三世帯世帯と四世代世帯を合わせて「三世帯以上世帯」とし、リフォーム実施状況を検討する。

4. 三世帯以上世帯におけるリフォームの実施状況

4.1 住宅の属性

リフォームを実施した三世帯以上世帯を、年度別に表示すると、表4のようになる。各年度とも一定の数を示すが、平成16年度以降の近年に、増加傾向を示している。以下では、三世帯以上の世帯を対象にした分析と、他の世帯型と比較することを通して、三世帯以上世帯の実態を明らかにする。

住宅の建て方(図3)、構造(図4)について、三世帯以上世帯を、他の世帯型と比較してみると、建て方では一戸建、構造では木造の住宅が約9割を占めていた。特に、三世帯以上の世帯では、上記の傾向が強かった。世帯人数が少ない世帯では、共同建の住宅に居住することも可能であるが、親世帯と同居する三世帯以上世帯になると、住宅規模を必要とし、共同建では増築ができないので、一戸建に居住せざるを得ないという状況が読み取れる。増築をする場合にも、木造の方が容易である。

新築後の築年数をみると(図5)、三世帯以上世帯のリフォーム時における築年数は、他の世帯に比べ長い年数に分布していた。他の世帯では、30年未満が約6割を占めているのに比べ、半数を割って低く、50年以上が2割以上の高い割合を占めていた。三世帯以上世帯における平均は築40年であり、古い住宅を、大切にリフォームし、活用している実態がわかった。古いも

表3 世帯型別、リフォーム費用の平均

家族構成タイプ	平均費用
単身 (15)	1068 万円
高齢単身 (5)	333 万円
夫婦 (58)	933 万円
高齢夫婦 (14)	1176 万円
夫婦+子 (110)	1032 万円
親+夫婦 (22)	982 万円
親+夫婦+子 (90)	1273 万円
祖父母+親+夫婦+子 (6)	1307 万円

* ()内はサンプル数

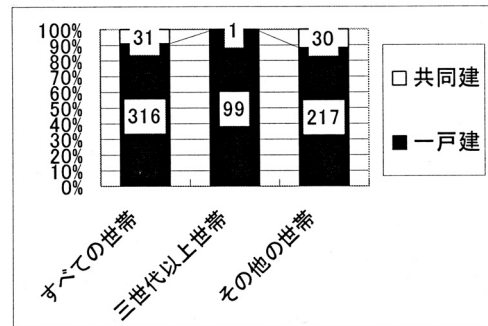


図3 住宅の建て方

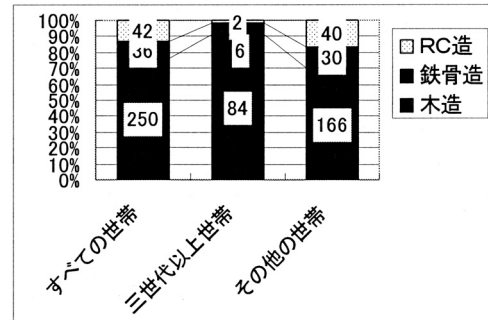


図4 住宅の構造

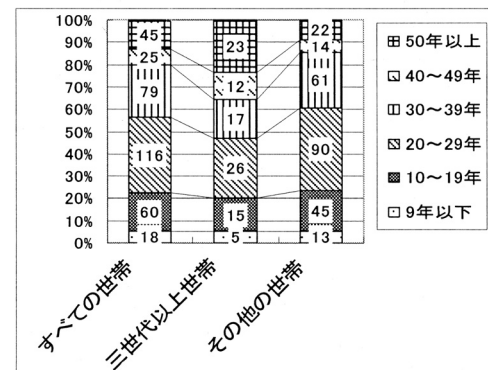


図5 築後の年数

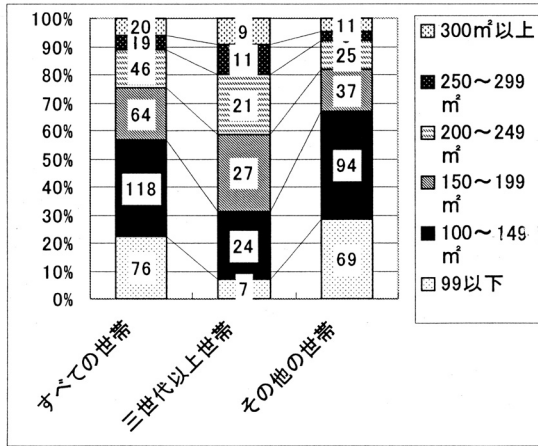


図6 延べ床面積

には、幾世代か以前の祖先から継承する住宅が含まれている。

4. 2 住宅規模

リフォーム後の延べ床面積を、世帯型別に図6に示す。これによると、他の世帯の規模では150㎡未満が6割以上を占めるのに対し、三世代以上世帯では、150㎡以上の住宅が約7割を占めているように、高齢者が同居する世帯の住宅規模は大きくなっていった。

図7では、三世代以上世帯について、世帯人数別の延べ床面積を示す。世帯人数が増加すると、住戸規模も増加する様子が明らかである。5人の場合、最も高い比率を示すのは「110~149㎡」であり、6人世帯では「150~199㎡」で、7人では「200~249㎡」という関係がある。

住戸規模が広いことは、リフォームに要する費用にも影響を与える。リフォームに要した費用をみると(図8)、三世代以上では、1000万円以上かけている世帯が約6割を占め、平均値は1,387万円であった(表5)。その他の世帯と比べ、平均で1.5倍の費用を用いていることがわかった。

住宅全体の延べ床面積に対して、リフォームを実施した面積が占める比率を「リフォーム率」¹⁾と定義し、家族人数との関係を見ると(図9)、人数にかかわらず「10~29%」、「30~49%」の占める比率が高い。また、増築は、6人以上の世帯で実施されていた。同居にあたり家族人数が増え、増築して空間を広げるリフォームが行われていることがうかがえた。

5. 住空間における世代間の関係

5. 1 世代間型の設定

玄関、浴室、洗面所、L、DKの5つの部分について、世代間での共有頻度を集計した(表6)。集計は重複集計で、世代間で最も共有しやすい生活スペースは浴室であった。続いて、玄関、DK、L、洗面所の順

であった。この関係をふまえ、共有度により図10の5段階の世代間型を設定した。5つの部分を1つも共有しない住宅を「独立型」、5つすべてを共有する住宅を「融合型」、部分的に共有する住宅を「部分共有型」、「部分共有型」は共有度が高い生活スペースを共有する住宅から順に「部分共有型 Grade 1」、「部分共有型 Grade 2」、「部分共有型 Grade 3」と段階的に設定した。

5. 2 世代間型の実態と動向

リフォーム前後における世代間型の変化をみると(表7)、リフォーム前では、「独立型」(別居も含む)が14サンプル、「部分共有型 Grade 1」が4サンプル、「部分共有型 Grade 2」が8サンプル、「部分共有型 Grade 3」が6サンプル、「融合型」が53サンプルであった。リフォーム後では、「独立型」は6サンプル、「部分共有型 Grade 1」は14サンプル、「部分共有型 Grade 2」は20サンプル、「部分共有型 Grade 3」は6サンプル、「融合型」は40サンプルに変化した。

リフォームにより「独立型」と「融合型」が減少し、「部分共有型」が増加していることがわかる。「部分共有型」は、リフォーム前は21.2%であったのに対し、

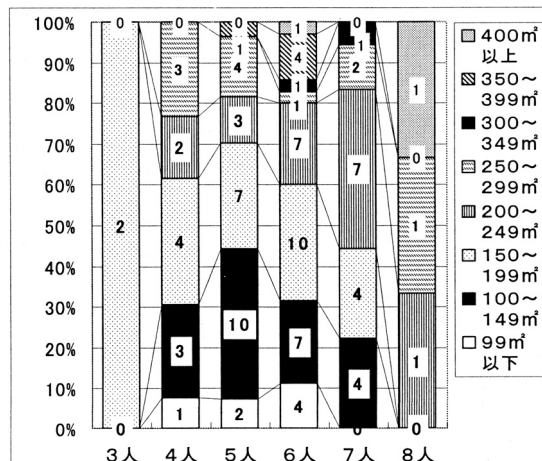


図7 世帯人数と延べ床面積

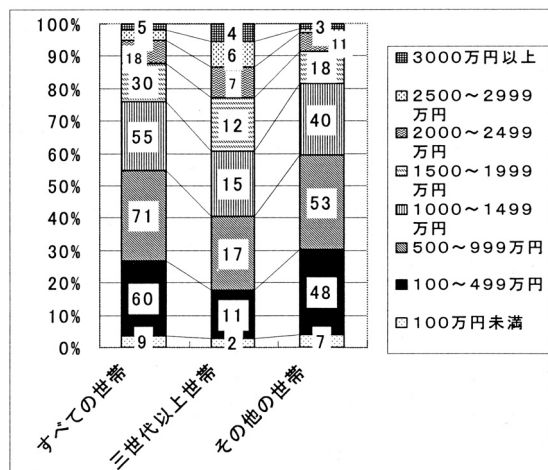


図8 リフォーム費用

表5 リフォーム費用の平均値

	すべての世帯	三世帯以上世帯	その他の世帯
築年数	32年	40年	29年
リフォーム費用	1,077万円	1,387万円	976万円

表6 複数の世代が共用する部分

	浴室	玄関	DK	L	洗面所
共有するサンプル数	32	29	21	17	6

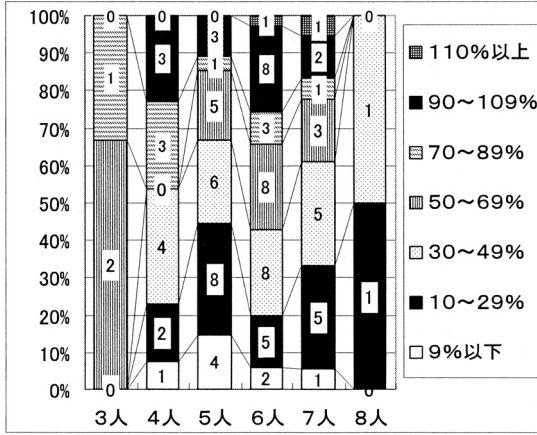


図9 世帯人数別、リフォーム率

表7 リフォーム前後の世代間型

●リフォーム前			●リフォーム後		
住宅タイプ	サンプル数	割合	住宅タイプ	サンプル数	割合
独立型 (別居も含む)	14	16.5%	独立型	6	7.0%
部分共有型 Grade 1	4	4.7%	部分共有型 Grade 1	14	16.3%
部分共有型 Grade 2	8	9.4%	部分共有型 Grade 2	20	23.3%
部分共有型 Grade 3	6	7.1%	部分共有型 Grade 3	6	7.0%
融合型	53	62.4%	融合型	40	46.5%
総計	100	100.0%	総計	100	100.0%

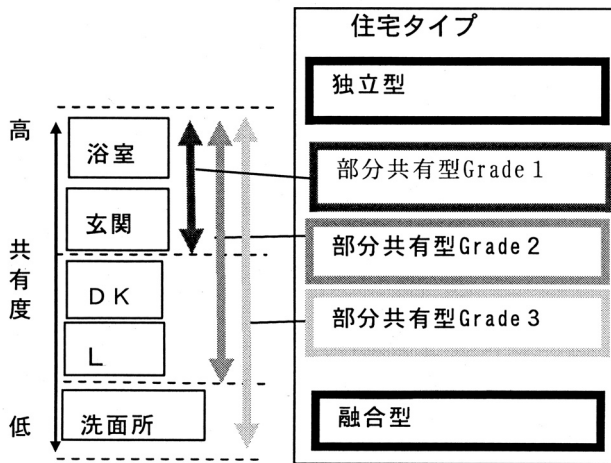


図10 世代間型の分類

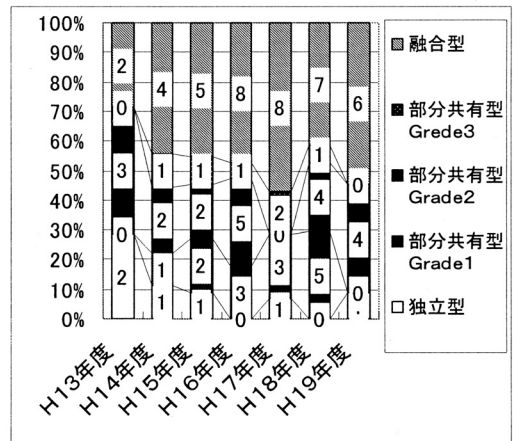


図11 世代間型の推移

リフォーム後は45.6%と増加していた。特に、「部分共有型 Grade 1」と「部分共有型 Grade 2」において増加していた。世代間に適度な距離感を保ち、相互の生活を大切にしたい同居をしたいため、それぞれの世代の要望に合った生活スペースを選択することができる「部分共有型」が望まれていたのである。

リフォーム後の世代間型について、近年の動向をみると(図11)、「融合型」が、3割から5割強へと増加傾向にあった。一方、「独立型」は、平成14年度から1割に満たない減少傾向を示し、世代間の適切な距離を確保する必要性を示している。

5.3 世代間型と家族構成との関係

リフォーム後の世代間型と世帯型との関係を見ると(図12)、「両親+夫婦+子」は、他のタイプに比較し

て異なった傾向を示していた。

他の世帯型では「融合型」が占める比率が高かったが、「両親+夫婦+子」では、すべての世代間型がみられたが、「部分共有型」を選択する比率が高かった。この「両親+夫婦+子」という世帯型は、どのように同居をするにしようか、一番悩み、葛藤しているタイプと考えられる。同居するにあたり「部分共有型」が多いことは、両世代が互いにどのように過ごしたいか相談し、その家族ごとに結論が出ていて、それぞれの家族の生活に合ったリフォームがなされている結果であるといえる。

「融合型」の比率が高い「片親+夫婦+子」では、若い世代の生活の中に片親を位置付けていこうとしていることが読みとれる。

次に、世代間型と世帯人数の関係を見ると(図13)。

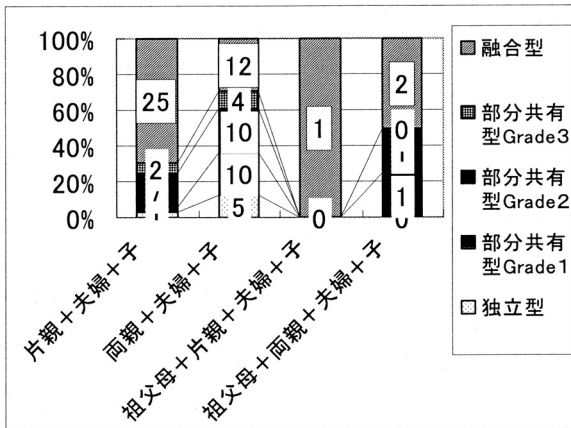


図12 世帯型と世代間型

世帯人数が少ない段階では「融合型」の比率が高く、一体的な生活をしているが、世帯人数が増加していくと、分離した世代間へと変化していく様子がみられた。「部分共有型 Grade 2」をとる世帯人数は4人から7人の間であった。「独立型」などの分離した構成の比率が高くなるのは6人以上である。6人の世帯構成を考えると、両親と夫婦と子ども2人の構成が一般的で、世代間が分離した構成を選択しやすくなることが考えられる。2組の夫婦が同居するため、生活時間の違いやプライバシーの確保のため、生活を独立させようとするからである。8人になると、DKやLも1つでは不十分で、さらに分離度は高くなるのである。

リフォーム後の家族1人当たりの延べ床面積と世帯間型との関係を見ると(図14)、1人当たりの延べ床面積が大きくなるほど、分離傾向が高くなる傾向にある。特に、「部分共有型 Grade 2」が増加していた。1人当たりの延べ床面積「50~59㎡」においては、「部分共有型 Grade 1」から「部分共有型 Grade 3」が占める割合が8割を超えていた。この住宅規模になると、生活を部分的に共有しても、各世帯構成員が、広くゆったりとした生活スペースをとることが可能になるということがわかった。

6. リフォーム前後における世代間型の検討

6.1 リフォーム前後における世代間型の変化

それぞれの世帯間型ごとに、リフォーム前後で変化した関係を検討した(図15)。現在が「部分共有型」、「融合型」では、リフォーム前の世代間型から変化していない割合が高かった。世代間型間の変化がなかった割合は、「融合型」は約85%、「部分共有型 Grade 1」は約20%、「部分共有型 Grade 2」は約35%、「部分共有型 Grade 3」は約35%であった。「部分共有型 Grade 2」と「部分共有型 Grade 3」で、同じ住宅タイプが支持されていた比率が高かった。その理由として、第1に、程よい距離感を持って生活できること、第2に、動線の重なりが苦にならない共有スペースであるこ

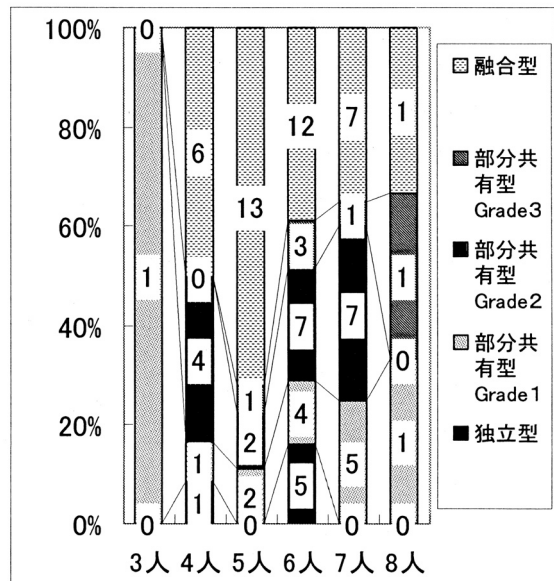


図13 世帯人数別、世帯間型

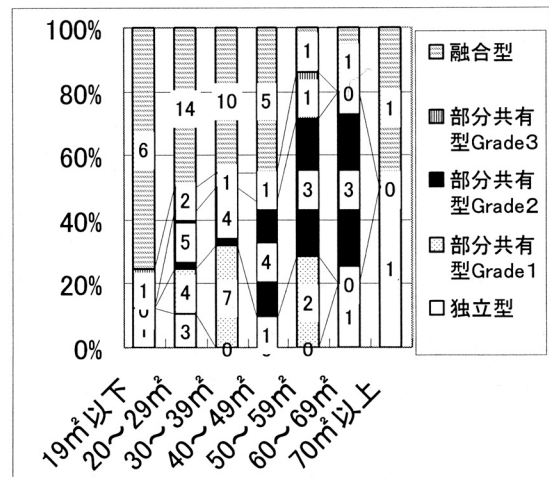


図14 延べ床面積別、世帯間型

と、が考えられる。リフォーム以前から「部分共有型」、「融合型」という共用度が高い世代間型の住宅に住んでいた世帯では、生活スペースを共有することに対して慣れていたと考えられる。

サンプル数では、「融合型」が53サンプルから40サンプルに減少し、「部分共有型 Grade 1」は4サンプルから14サンプルに、「部分共有型 Grade 2」は8サンプルから20サンプルに増加していた。リフォームにより「独立型」や「融合型」の世代間型が減少し、「部分共有型」をとる世帯が増加する傾向がみられた。どの世代間型からも、リフォームを行うことで「部分共有型 Grade 1」や「部分共有型 Grade 2」へ変化する比率が高かった。また、「独立型」(同居を含む)から「部分共有型 Grade 1」への変化が顕著で、別居から同居に変化する世帯の場合、「部分共有型 Grade 1」が適しているといえる。

6. 2 変化後に共有する部分の組み合わせ

リフォーム後の世代間型として、「部分共有型 Grade 1」と「部分共有型 Grade 2」が形成される比率が高かった。これらの世代間型において、どんな部分を共同化しているかについて、リフォーム前後の変化に注目して詳しく検討した。

まず、「部分共有型 Grade 1」の共有部分の変化をみると(図16)、リフォーム後のすべてが、浴室か玄関を共有するもので、両者を共有するタイプが最も多かった。浴室と玄関は、家族の動線が同時に重なりにくいスペースであるため、最も共有しやすい部分と考えられる。

次に、「部分共有型 Grade 2」の共有部分をみると(図17)、浴室と玄関を基礎として、DKやLを加えた様々が形成されていることがみられた。その中で、浴室と玄関とDKとLを共有するタイプが最も多かった。このタイプの利点は、住宅全体の規模を小さくできるばかりでなく、食事の時間やその前後の時間に家族団樂の時間をとりやすいことと、家事を共同・分担でき、家事時間の短縮化を図ることが可能になることと考えられる。

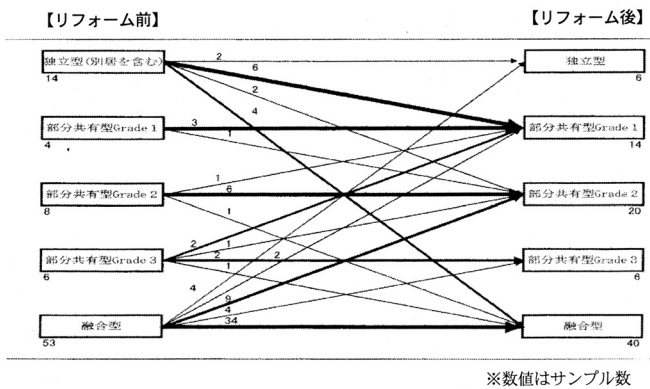


図15 リフォームによる世帯間型の変化

7. 世代間における共有部分の検討

7. 1 世代間型と世帯型の関係

リフォーム後の比率が高かった「部分共有型」の世帯に注目し、世帯型と共用している部分の使い方について検討した(図18)。浴室、玄関、DK、洗面所を共用している場合、世帯型では、「両親+夫婦+子」が高い割合を占めていた。しかし、Lを共有する場合には、「両親+夫婦+子」と「片親+夫婦+子」が同じ比率で、他の部分と比べると、後者の比率が高いことが注目された。このことから、「両親+夫婦+子」は、Lは別々に所有して世代独自の時間を大切にしたいとする場合が多いこと、逆に「片親+夫婦+子」の場合には、若い世代の団樂の中に片親も含むという生活を行っていることがうかがえた。

7. 2 Lの果たす役割

世代間の適切な関係を形成する上で、Lを共用するか否かは大きな要因であることが分かった。Lを2つ持つ世帯では、それらのLを、世代を超えた〈団樂のためのL〉か、1世代に限定した〈プライベートのL〉の

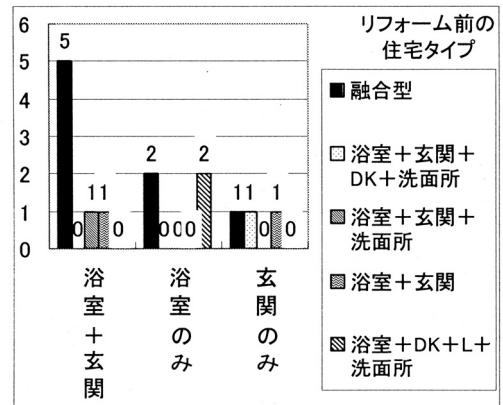


図16 部分共有型 Grade 1の共有部分と変化前の世代間型

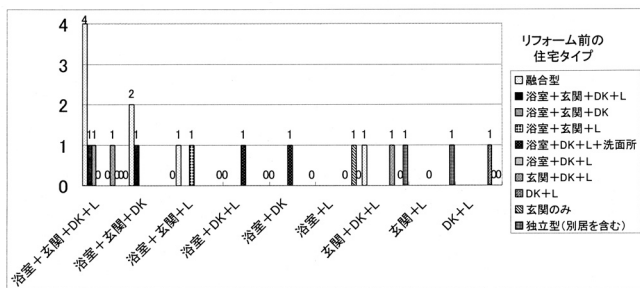


図17 部分共有型 Grade 2の共有部分と変化前の世代間型

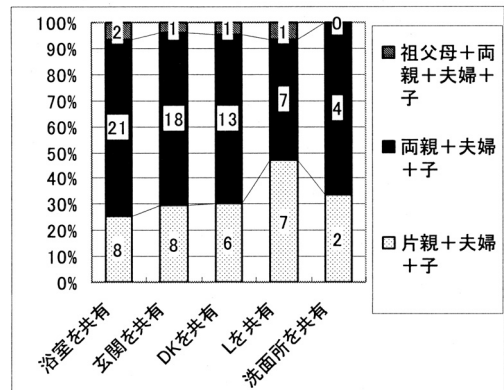


図18 共有部分と世帯型

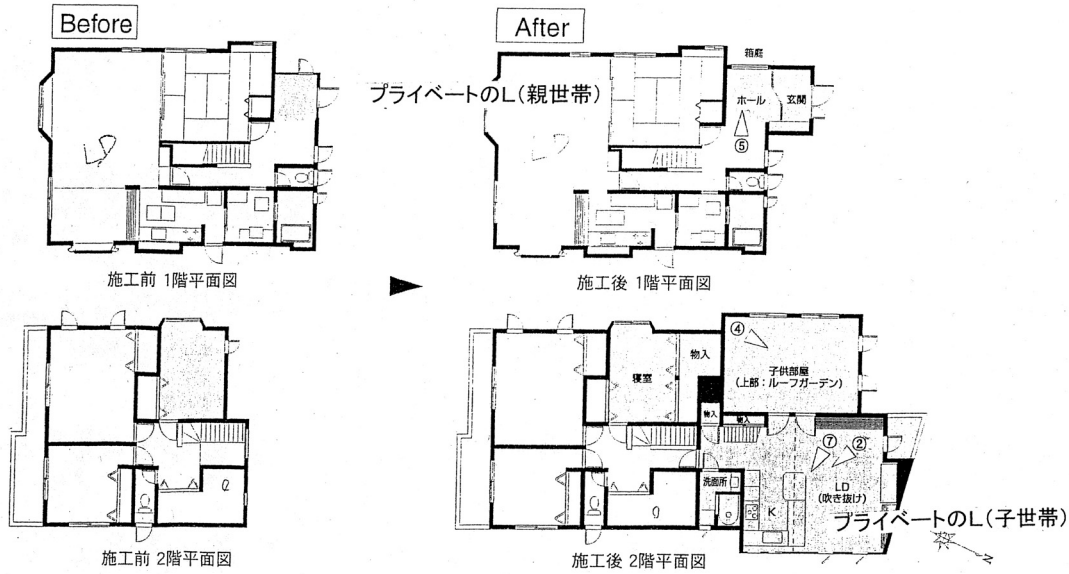


図19 世代専用のLを確保した事例

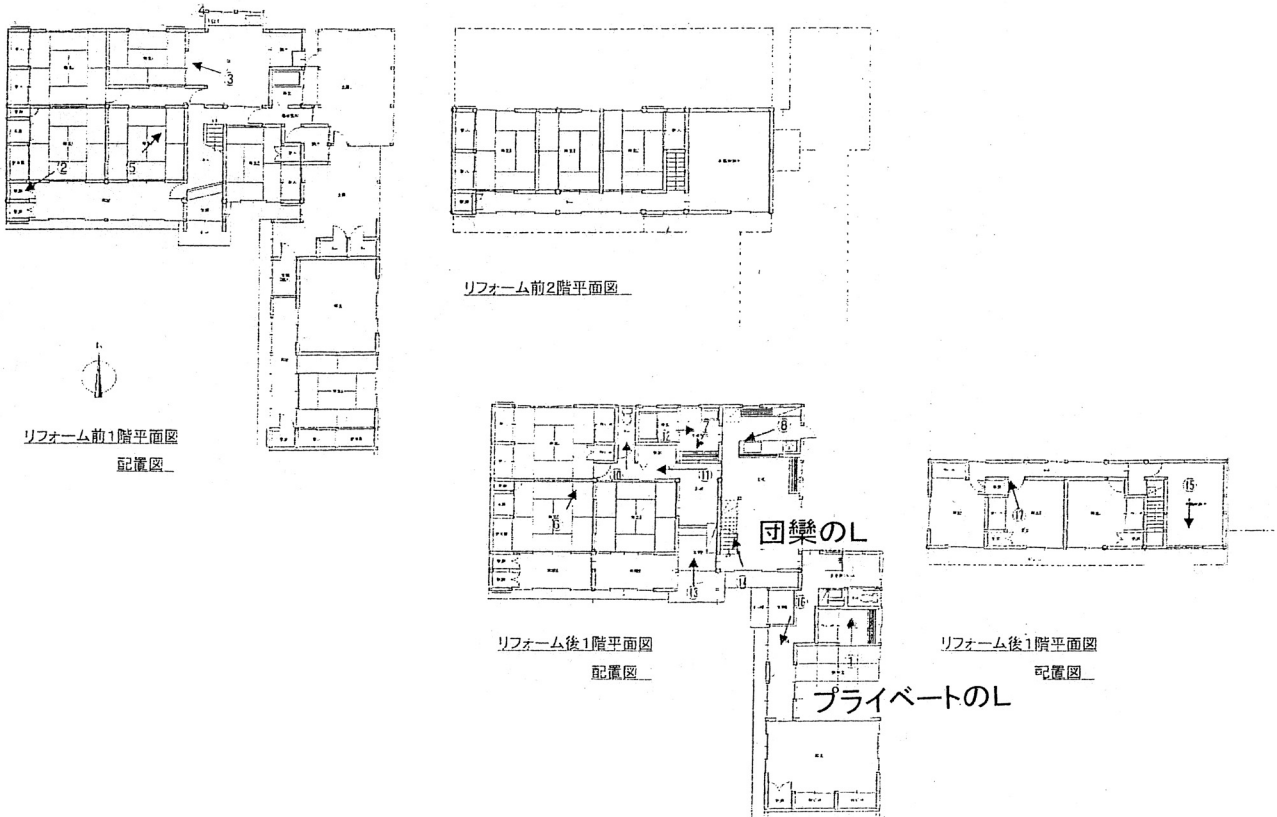


図20 世帯全体のLを確保した事例

2種類に使い分けることが可能である。

Lを2つ持つ世帯の事例は、2つのLを各世代専用の〈プライベートのL〉に使用している事例と(図19)、一方は世帯全員の〈団樂のためのL〉とし、もう一方を若い世代の〈プライベートのL〉とした事例(図20)という、2パターンに分けることができた。前者の、親世代、子世代が、それぞれ専用のLを持つタイプの世帯は、Lを2つ持つ21サンプル中14サンプル、後者の、

〈団樂のためのL〉と〈プライベートのL〉を持つ世帯は7サンプルであった。

したがって、Lを2つ持つ世帯では、親世代と子世代が、それぞれ専用のLを持つという選択以外に、共用した団樂の場を確保しつつも、世帯の都合によって新たにLを確保するという選択が行われていることがうかがえた。

Lを共有する世帯と、Lを2つ持ち、〈団樂のための

L)を形成している世帯を合わせた、世帯全体で団欒するためのLを所有する世帯は、40サンプル中24サンプルで、半数以上の世帯が、Lを家族団欒のスペースとしている状況がある。リフォームを行うことで世帯が団欒できるLを確保し、家族間のコミュニケーションの充実を図ろうとする傾向が強いことを示している。

各世代ごとに専用のLを確保するタイプの世代間型をみると、14サンプル中12サンプルを「部分共有型 Grade 1」が占めていた。一方、〈団欒のためのL〉を持つ世帯の世代間型には「部分共有型 Grade 1」は存在しなかった。このことから、DKを分離して持つと、〈団欒のためのL〉を確保しなくなる傾向にあることが分かる。世代を超えて家族団欒の時間を確保するLを確保するためには、DKを共有するとよいと考えられる。そして、二世代間で、ある程度の距離感を保ちたい場合には、〈団欒のためのL〉とは別に、〈プライベートのL〉を確保することが有効であると考えられる。

8. ま と め

本研究の分析により、三世代以上世帯の同居について得られた成果は、以下の3点にまとめられた。

第1に、リフォームが行われやすく有効な住宅の属性と世帯型が明らかになった。住宅の属性では、戸建、木造の住宅が9割を占めた。世帯型では、高齢者を含む三世代以上世帯における実施比率が高かった。三世代以上世帯のリフォーム時における新築後の築年数平均は40年で、古い住宅をリフォームして、大切に活用していた。木造であることは、リフォームのしや

すさにつながっているのである。また、三世代以上の世帯は資金を多く有していることも、規模が大きいリフォームを行う上で有効であった。

第2に、リフォーム後の世代間の結合・分離状況を検討した結果、生活の一部を共有した空間構成が増加している傾向がみられた。それは、限られた空間の中で、ゆとりのある生活空間を確保する工夫であるだけでなく、生活様式が異なる各世代相互が生活共同体として暮らしていくことができるための工夫でもある。家族との時間を大切にしつつも、一人ひとりの生活のリズムやプライベートな時間を確保することができる住宅のあり方が求められている。

第3に、生活空間を部分的に共用する場合、世代間で最も共有しやすい生活スペースは、浴室であった。続いて、玄関、DK、L、洗面所の順に共有しやすいという結果であった。この中で、Lは世代間の関係を表す上で重要な部分であった。Lを2つ持つ世帯において、一方のLを、家族全員の団欒のためのLとして設置している場合が多く、Lに世代間を結合する機能を持たせていた。また、高齢者の世代が片親の場合、Lを共有しやすく、夫婦の場合は、それぞれの世代ごとにLを使用するという特徴がみられた。このような、世代間の関係のタイプごとに対応した構成の住空間が重要である。

註

- 1) リフォーム後の延床面積当たりのリフォーム実施面積で算出した。

(2009年9月17日受理)